

文語の苑

メールマガジン第十七号（平成二十四年十一月）

小倉百人一首 15 紀友則

久方の光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ

現代の私たちにとってこの紀友則の歌は、平安朝を代表するや（よ）うな華やかな歌です。平安朝のことを、単に「王朝」と言ふ（う）ことがあります。この歌には、「王朝の春」といふ言葉がいかにもびつたり合ふ。「久方の」は光の枕詞、のどかな春の日、満開の桜の花びらが散る情景を、この歌は見事に詠ひ（い）上げてあ（い）ます。歌の後半の「しづ心なく花の散るらむ」は、「らむ」が疑問と推量の助動詞ですから、「ど」して花は静かな心もなく散るのだら（ら）うか」の意味です。花の盛りは同時に花の散り初め。光のあまねく注ぐ中を、桜の花びらが舞ふ（う）蔭に、どうして花は散り急ぐのか、いつか花は散り果てるのかといふ（う）不安が忍び寄ります。駘蕩たる春の情景とその蔭の一抹の不安。それがこの歌の魅力なのでせ（しよ）う。今から見れば意外ですが、この歌は平安時代は広く知られて居りませんでした。それを鎌倉時代になって藤原定家が高く評価しました。在原業平が藤原基経の四十の賀に送った歌、「桜花散り交ひくもれ老いらくの來むといふなる道まがふがに」の、一面に散る桜の花に老いの来る道が紛れてしまふ（う）イメージが思ひ（い）浮かびます。平安時代でも最も天下泰平で、古今集の編纂など文化の栄えた延喜の盛世にも、どこかに将来への不安があったのでせ（しよ）うか。

延喜より前の宇多天皇の時代には、まだ平安初期の桓武天皇、嵯峨天皇、或いは最澄と空海の、漢文化全盛時代の余韻が残つてあ（い）ました。漢文化に通じた菅原道真を宇多天皇が重用なさつたのも、この風潮からです。所がその菅原道真の進言により、遣唐使派遣が終ります。宇多天皇は藤原時平と菅原道真を左右大臣に任じられ、醍醐天皇を輔佐させようとなさいますが、藤原時平がすぐに動いて、菅原道真を九州の太宰府に左遷します。古今集が撰集されたのは、その四年後、さらにその二年後に唐が滅亡します。唐時代の東アジア世界は、中央に唐の大帝国が君臨し、周辺には唐の政治制度や経済力、或いは唐の文化に依存する小国が群立してあ（い）ました。日本もさ（そ）うした周辺国の一つでしたが、その中で相対的に独立した大国です。唐といふ（う）大樹が倒れると、周辺の小国は一斉に滅んで行きました。新羅も渤海もチベットの吐蕃も、今の雲南の南詔もです。その大激流に捲込まれなかつた日本は、国の中核文化を漢文化から国風文化に転換します。それまでの勅撰漢詩集や歴史編纂から、古今集のや（よ）うな勅撰和歌集への転換です。

古今集の撰集には、このや（う）な歴史的意義がありました。ただ紀友則を筆頭とする撰者は、地位の高い人たちではありません。藤原氏など地位の高い人たちは、漢文化の方を重視して居り、紀友則や紀貫之、及び古今集真名序の作者、紀淑望など、紀家の人たちが、和歌の伝統をよく伝へ（え）てあ（い）たのでせ（しよ）う。

紀友則は古今集の完成を待たず、世を去りました。そのとき紀貫之と壬生忠岑が、友則の死を悼んで詠った歌が、古今集に収録されて居ります。

明日知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ（貫之）

時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを（忠岑）

文語の苑

メールマガジン第十七号

祈るしるしの神風いの かみかぜ

愛國百人一首を讀む(十二)

敕として祈るしるしの神風に寄せくる波ぞかつ砕けつる

藤原爲氏ふじはらのためうぢ

上皇の敕命を奉じて敵軍調伏を御祈りした所、神が御聞き届けになつたのであらうか、神風が吹いて、打ち寄せくる波のやうに我が國に攻めて來た敵軍が乍ち砕け散つてしまつた、有難いことである。上の句の「敕として祈る」は詠者爲氏が元軍來寇の最中、龜山上皇の敕を受けて、敵(元)軍調伏を祈願のため伊勢神宮に參宮した事を指します。其の靈驗のゆゑにか、颱風が元の船を襲ひ、撃滅したと、即ち「神風」が吹いたことを爲氏はその歸途に聞き知り、この歌を詠みました。時に弘安四年(一二八二)でありました。

下の句の「寄せくる波」が襲來した元軍を意味するのは當然ですが、次の「かつ」は二つの事象がすぐに連續的に發生することを示す副詞で、この場合は「寄せくる」と「砕けつる」がすぐに續いたことを表してゐます。最後は「波ぞ」の「ぞ」を受けて完了の助動詞「つ」を連體形で結んだ係結となつてゐます。

鎌倉時代を象徴するのは、何と言つても蒙古襲來、即ち文永、弘安の兩役の七年間です。愛國百人一首には掲出の歌以外にこれを詠んだ二首を撰録してあります。

末の世の末の末まで我が國はよろづの國にすぐれたる國
西の海よせくる波も心せよ神の守れるやまと島根ぞ

宏覺禪師くわつかくぜんじ
なかとみゆけはる
中臣祐春

いづれも、素晴らしい我が國が他國の武力に屈してなるものかといふ氣概を示してゐます。

ここで重要なのは、この大勝利が實は先立つ文永の役の反省と其の對策の實行の結果であつたことです。戰鬪の形態からして異例の大苦戦を強ひられ、辛うじて颱風の襲來で事なきを得たのですが、もしこれを「神風」と喜んでいたら、七年後の弘安の役を乗り切ることができなかつたでせう。事實は苦戦の原因が敵の上陸を許したことにあり、海岸一帯に石築地を廻らし、敵の上陸を防ぎ戦つたことが成功に繋がりました。

五百七十年後の嘉永六年(一八五三)、ペリー率あるアメリカ艦隊の來航後、江戸幕府は急遽品川沖に臺場を作つて江戸灣侵入を防がうとしました。これは「石築地」の故智に學んだものと思はれます。尤もこれは財政難の爲もあつて完成に至らず、効果も上りませんでした。更に前の大戦では、アツツ島から沖繩に至る米軍の島傳ひ作戦に對應できず、遂に敗戦の鐵槌を受けることになりました。其の背後に我が國を「神國」とし、最後には「神風」の守護があるといふ安直な信念が根強く残つてはゐなかつたか、反省の要があります。

市川浩

(注)市川先生の原稿につきては、事務局手違ひにより、前回のメルマガ十六号に「愛國百人一首(十三)」、今回のメルマガ十七号に「愛國百人一首(十二)」と順番を逆に掲載する結果と成りたること、お詫び申し上げます。(従つて、文中に「前回」とあるは原稿の通し番号の順番に従はれたし。)

文語の苑

メールマガジン第十七号

文語文語歌曲「仰げば尊し」(小學唱歌集)

校歌と共に學校で必ずのやうに歌はれるのが卒業式の歌で、その定番が「仰げば尊し」でした。歌つてゐると涙がひとりでに流れ、その思ひ出が何十年もたつた同窓會にまでつながつてゐました。しかし戦後、教師が労働者になつたためか感謝の念が薄れ、だんだんに、「大地讃頌」といつた別の歌に代はられはじめ、さらにはバブル崩壊の年に作られた「旅立ちの日に」が歌はれるやうになつてきました。一方で「二十四の瞳」や「女王の教室」といつたドラマで「仰げば尊し」が使はれて好評だつたこともあり、素直に見直してみると歌詞も曲もなかなか優れてゐると改めて心を搏たれます。

この「仰げば尊し」、明治時代に小學唱歌に入れられ、作詞者、作曲家共に不明として全國で一齊に歌はれたのですが、平成二十三年になつて英語民謡研究者櫻井雅人一橋大名譽教授がアメリカの樂曲であることを究明しました。歌詞の内容も「別れ」、百年経つての快學です。

一 仰げば尊し 我が師の恩

教の庭にも はや幾年

思へば いと疾し この年月

今こそ 別れめ いざさらば

*仰げば 歴史的假名遣のとほりに發聲するとよいのですが、実際にはアオゲバと現代假名遣の讀みで歌はれてゐます。關西では「煽る」を「アフル」と發音してゐることが参考になります。

*いと疾し 甚だ 早い

*こそめ この歌が難しいとされる係結びの語句。「今別れむ」

二 互に睦し 日くるの恩

別る後にも やよ 忘るな

歌曲「仰げば尊し」(小學唱歌集) 文語歌曲「仰げば尊し」(小學唱歌集)

身を立て 名をあげ やよ 勵めよ

今こそ 別れめ いざさらば

*やよ 「おい」「おい」といつた呼び掛けの言葉。

三 朝夕 馴にし 學びの窓

螢の燈火 積む白雪

忘るる 間ぞなき ゆく年月

今こそ 別れめ いざさらば

*螢・雪 「螢の光や、窓の雪、を照明として本を讀んで勉強した」といふ故事による、あるいは創作の小道具による勉學のあり方を示してゐます。

文語の苑

メールマガジン第十七号

権力の二重構造

「名」と言ひ「實」と言ふ。此れ即ち、日本國の権力の二重構造を端的に言ひ表はしたるなり。民間の企業に於ても、「會長」は棚上げせられたる「名」にして、「實」の決裁は社長に委ねらる。國家の組織を見るに、「名」に於て長は天皇なれども、「實」を司るは首相なり。大日本帝國に在りても、天皇は「實」には非ざりき。

「實」の機構を更に分析するに、今再び「名」と「實」ありて、恰も入子細工を見るが如し。首相は「實」の如くなれども、裏に「閻將軍」あり。

田中角榮氏を稱して、此は言へり。否、獨り角榮氏に非ず。平成の御代には格段のストロングマンは之なく、小澤氏も帶に短きの觀ありとはいふ條、鳩山・菅・野田の諸公を見るに、いづれも「實」には非ずして、「名」若くは「虚」の印綬を帶ぶるに過ぎず。畢竟、「實」いづくにかなからずんばあらざるなり。

天皇は日本國の主なれども、昔よりその地位は「名」にてあり。「實」を兼ねたるは、僅々、古代、平安末期および建武の中興の頃に留まる。

江戸時代には、太白日を犯すが如くに幕府主上を輕んじ奉る。後水尾天皇に至り給ひては、幕府より、「關東にては、御上を隱岐に『移し奉る』用意あり」とぞ恫喝せられ給ひし。

帝は幕府に鬱屈の御思ひあり、つひに獨斷にて、皇女に讓位のことあり。是、秀忠の外孫・明正天皇なり。

秀忠は、「幕府の許可」を得ずして天皇が大事を行ひ給へるを憤りて、「隱岐遷幸」を企圖するあれども、家光の諫止に據りて思ひ留まる。

「水尾天皇」存在せざるに、「後水尾天皇」のおはしますは理解に苦しむ所なり。

「水尾天皇」は清和天皇の異名なり。「後清和天皇」とあるべきに、「後水尾天皇」と稱へたるに過ぎず。因みに、桓武天皇を「柏原天皇」と稱へ奉るに據りて、室町後期に「後柏原天皇」ましましたまふ。「後深草天皇」は「後仁明天皇」の謂ひなり。此の如き諡號、十件に垂んとす。

而して、「明正天皇」は、奈良時代の女帝「元明天皇」と「元正天皇」（母娘）より採りたるなり。

「権力の二重構造」の顯著に露はれたるは鎌倉時代なりき。

「實」は幕府、「名」は朝廷の抑へたるは言ふに及ばざれども、この時期は、「入子細工」の華と言ふべし。

幕府の「名」は將軍なれども、「實」は北條氏が取りてあり。

然而、北條氏また一枚岩ならず。

「名」は執權にして、「實」は得宗。

「得宗（徳宗）」は、そもそも北條義時の法名なれども、後に、北條嫡流の家長の謂ひと成る。

執權たるには、嫡流に生るるの要なし。傍流より出でたる執權も少なからず。然れども、傍流より執權出でたる時は、得宗之を監督し、大事は得宗之を決するなり。

文語の苑

メールマガジン第十七号

得宗、執権を兼ねるは稀まれにして、常態は片や得宗あり、片や執権ありたるなり。幕府滅亡して切腹したる北條高時は、鎌倉最後の執権にてありきと誤解する向き多かれども、さにあらず。最後の得宗なり。既に以前に執権を経験せり。

朝廷にても同断。

後鳥羽院は、土御門（皇子）、順徳（皇子）、仲恭（順徳皇子）を逐次皇位に据え給ひたれども、三代に互りて、「實」の力は後鳥羽院の掌中に在りき。

此の如く、退位し給ひたる天皇、「實」の主上にてまします様を「院政」と言ふ。而して、院政を擔當し給ふ院を「治天の君」とぞ申し上ぐる。

鎌倉以降は、朝廷式しきび微し給ひて、「治天の君」は朝廷の「實」を掌握するに過ぎず。

然れども、平安末期は「眞實の院政時代」にて、「治天の君」は日本國の「實」の首長にておはしましき。

白河・鳥羽・後白河の三院こそ、まさしく此れに該り給ひしか。

後鳥羽院は懷舊くわいきゅうの御思もたひ黙し難く、再び日本國の「實」を恢復せんと欲し給ひて、「主上御謀叛」に及び給へり。

高田友

文語の苑

メールマガジン第十七号

「文語教室」の普及について

「文語の苑」では文語の読み書きを楽しむ人がいずれ非常に少なくなってしまうのではないかと危惧し、(このメルマガ始め)様々な活動をしています。そのひとつに各地で開催している「文語教室」があります。その数は未だ少なく、また集まる人も決して多くありませんが、文語を読める人、書ける人を少しずつでも増やして行く為には、このような地道な営みを欠かすことはできません。

ここでは文語で書かれた名作を一緒に勉強したり、参加者が書いた文語文を添削したりしています。参加者の殆どはシニアとも言つべき年齢層の人たちですが、小学校でするようにみんな声を出して読むことが楽しいと感じています。また、最初は口語文語の混在文しか書けなかった人が、先生の指導で文語文法に則った格調高い文章を短期間のうちに書けるようになる事に驚いたりしています。

私はこのような教室を更に増やしたいと考え、東京、横浜、川崎でいろいろ動いたことがあります。しかし、その結果は上出来とは言えないものでした。

教室を開催するための要件は先生(指導者)、生徒(参加者)および教室(場所)です。費用面の制約がある中で、この三つを適切に揃えることはそれほど簡単ではありません。まず、物理的に必要となる教室を準備せねばなりません。市や区が持っている センターや図書館、博物館など文化施設を手当たり次第に訪問してみました。その一室を「文語の苑」のような文化団体に使用させることは全く問題ないのですが、毎月の特定日、特定の時間に予約することは殆ど不可能でした。月の利用はその前々月の同日に抽選で決定、等のルールが一般的で、これでは先生生徒ともに予定が立ちません。利用申込の段階で参加者を列記するよう求められることもあります。教室を設置した上で生徒さんを募るのでしたら、これは無理です。

指導者については「文語の苑」のメンバーに依頼します。しかし、先生を出来るほどの学識を有し、かつ時間に余裕があるメンバーは(今のところ)それほど多くありません。いきおい、一部の有資格者が複数の教室を担当することとなり、教室数が増えると先生方のスケジュールも窮屈になります。唯、これは内部的に調整がつけられます。

参加者の募集も容易ではありません。文語を勉強してみたいという人が一定数いるとは思いますが、単に募集ちらしを見ただけでは、多少の予習復習が必要な勉強の場へ出向き難い事も理解できます。新聞や雑誌で広告すれば多くの生徒さんが集まるのですが、費用がかかり過ぎます。また、抽選の結果で教室の場所が変わるかも知れないというのは広告も出し辛いのです。

公共文化施設が「自主企画」する催しがあります。室を貸すのではなく、その施設が主体となり自施設内の室を半年等のまとまった期間、優先的に確保し、教室を開催するのです。自治体の生涯教育課などの肝いりで施設の一部をそれら自主企画向けに利用することが義務付けられていることもあります。

これらの「自主企画」として「文語教室」を採り上げてもらえるよう動いたこともあります。もし採用されれば教室は先方が確保してくれそうですし、自治体の広報紙などを利用して参加者を募集してくれそうです。我々は指導者を派遣するのみのので、理想的な形態です。

文語の苑

メールマガジン第十七号

しかし、これにも問題があります。世の中には「文語の苑」の他にも無数の文化団体があります。我々同様に 教室を開催したい団体の数も多いのです。自治体や施設の担当者／選定委員会はそれら多くの中から何を基準に選ぶのでしょうか。オープンにはしてもらえませんでした。

私はある施設の担当者に、日本文化の継承発展のため文語の衰退を防がねばならない。自主企画として「文語教室」を是非採用して頂きたいと訴えました。ところが、彼から「阿波踊り教室の開催を求める人もあなたと同様に、日本文化の継承発展のため、と言った」と返され、反論できませんでした。

多様な人々の多様な価値判断は受容するとして、また困難があるとしても、我々は「文語の苑」運動、「文語教室」を広めて行きたいと考えます。

「文語教室」の新たな開催の可能性をお持ちの方は是非、我々の事務局に「一報下さるようお願いいたします。

電話 03-5435-8355 (オフィス赤谷内) メール bungsono@tt7.so-net.ne.jp

児玉稔

文語の苑

メールマガジン第十七号

森鷗外生誕百五十周年記念「文語の苑」シンポジウム 鷗外訳「即興詩人」の魅力

(平成二十四年十一月二十五日開催、於・東洋大学)における竹村牧男東洋大学学長挨拶

皆さんこんにちは。

本日は、昨年に引き続き、「文語の苑」の会を東洋大学で開催いただき、まことにありがとうございます。皆様には東洋大学にお運びくださり、厚く御礼申し上げます。心より歓迎申し上げます。

ご存知の方も多いかと思いますが、東洋大学は、明治二十一年に、哲学者・井上円了が創設した「私立哲学館」を起源としており、今年で創立百二十五周年を迎えました。その記念式典を、おとこの十一月二十三日に挙行し、また昨夜は海外の協定校から見えた賓客のさよならパーティがあり、このところ行事がいろいろと続いている次第です。

皆さますでにご来学時にご覧いただいたと思いますが、大学院の教育・研究活動に資する百二十五周年記念館の新しい建物も竣工し、今後の発展の土台を築くこともできました。私も、建学の理念に基づき哲学教育、時代に即応した国際化、学生一人ひとりの真の自己実現をサポートするキャリア教育、この三つの柱を掲げて教育改革に取り組み、グローバル人材の育成に全力を注いでいる所です。

そのグローバル人材に必要な諸能力として、語学力・コミュニケーション力が必要であることはもとより、重要なのは異文化理解・活用力であると思います。さらにその根底には、自国の文化理解・発信力というものが、ぜひとも必要でしょう。グローバル化すればするほど、独自の深い伝統を守り、発信していくことは、きわめて重要なことであると思います。本学創立者の井上円了は、あの時代にも関わらず、生涯に世界旅行を三度しております。哲学館を創設した翌年には早くも、欧米の視察に出かけています。円了がこの旅でもっとも感銘を受けたことは、どの国も、自国の学問あるいは言語・文章・歴史・宗教等の伝統を大切にし、「独立の精神」を有していることでした。ここから、日本伝統の学問・文化の擁護・発展の重要性を強く訴えるようになります。もちろん西洋の学問も研究教育すべきなのですが、日本の独立を全うするためには、まず伝統の学問を、傍ら西洋の学問を究明すべきだとするので、明治二十二年七月二十八日の「哲学館改良の目的に関して意見」には、次のようにあります。「各国、皆な其の国従来の学問芸術即ち其の国の言語学、文章学、歴史学、宗教学を講究して怠ることなく、益々之を保護し益々之を振起せんとすること切なり。是れ大いに其の国の独立に係ることにして、一国を諸強国の間に維持して独立を全うせんと欲せば、其の国の言語、文章、歴史、宗教を保護せざるべからず。……苟も日本国あり日本国固有の学術宗教ある以上は、先づ之を講究し傍ら西洋の学術を講究せざるべからず。」それから間もなく、同年八月八日には、「哲学館将来の目的」を発表、その中では、「……唯だ我が邦の学問中に日本在来のものと支那伝来のものと印度伝来のものの別あるのみ。而して其の所謂伝来のものは、其の初め日本に伝来してより以来千余年を経過し、我が国在来の文物と共に成長し共に発達して、一種固有の日本性を帯び、此の諸元素相和し相合して一種固有の国風民情を化成し、其の今日印度・支那にあるものと大いに其の性質を異にするに至れり。即ち其の学は日本固有の学と謂わざるべからず」と述べています。こうして、世界を知らばこそ、日本固有の学問・文化を深く尊重するに至ったのです。

しかし円了は決して偏狭なナショナリズムに陥ったわけではありません。一方で、客観的な真理を重んじ、西洋の学問を深く学ぶことを主張しました。日本の風習・慣習の正すべき点はぜひとも改良していかなければならない、とも思っていたのです。その客観的真理を追究する立場を宇宙主義と称し、哲学館の方向性を日本主義と宇宙主義を統合したものとしました。これを一言で表わした言葉が、「護国愛理」です。この護国とは、政治的標語ではなく、日本の歴史の中で形成された学問・芸術・文化の伝統を擁護し、発展させることを意味するものでした。

文語の苑

メールマガジン第十七号

この精神を脈々と受け継ぐ東洋大学は、今後、日本の伝統を重視し、その優れた点を国際的に発信していく活動を大いに展開したいと考えています。現に日本の哲学のみならず、日本型物作りの伝統とその精神についてや日本型経営組織のあり方等について、鋭意、研究・発信しております。そういう東洋大学において、日本古来の文語を尊重し未来に伝えていこうとする「文語の苑」の会が開催されますことは、創立者の精神にもかなった、まことに意義深いことであり、私も大変うれしく思います。言語は文化の根本であり、国民性ないし国民の精神の根本です。その文章に託された美しく高尚な精神を守り伝えていくことは、グローバル化した今日の社会においてきわめて重要なことです。私は「文語の苑」の活動を心から支援したいと思えますし、また学内にその運動を広めて参りたいと思えます。ぜひ今後とも、緊密な関係を維持してくださいませよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、今年のシンポジウムのテーマは、森鷗外生誕百五十年ということですが、文京区はこのことに大変力をいれておられますが、その文京区にある東洋大学がこの催しに参加できることは大変幸いに存じます。昔、東京大学図書館で鷗外文庫展があったとき、『成唯識論』も展示されていました。鷗外が漢文仏典をよく読んでいたことを知り、その教養の広さ深さに驚嘆したものです。鷗外には唯識研究をまとめた『唯識抄』の著作があり、『華嚴五教章』の著作もあります。幸田露伴など当時の知識人の仏典の学習は実に深いものがありました。東洋大学創立者の井上円了は一八五八年生まれで、一八六二年生まれの鷗外より少し先輩ですが、残念ながら両者の間に特に交渉は無いように思われます。しかし円了が少年時代に漢学を学んだ石黒忠憲（ただのり）は、後一八九〇年に陸軍軍医総監ならびに陸軍省医務局長、すなわち陸軍軍医序列第一位になっており、鷗外の上官であった人として、間接的に接点があります。私はこの八月末にたまたまベルリンに行ったとき、鷗外記念館にも寄りました。そこは鷗外が一八八四年以来ドイツに留学し、ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘンを経て、一八八七年四月、フンボルト大学のコッホに就くためにベルリンに来て初めて身を寄せたアパートなのですが、その記念館で、かつてのベルリンの地で石黒忠憲らと鷗外とが一緒に写っている写真を見ました。ウイキペディアによりますと、鷗外は一八八七年九月下旬、カールスルーエで開催された第四回赤十字国際会議に日本代表として出席した石黒忠憲の通訳官を務め、また翌年七月に石黒とともに帰国の途についたそうです。この記念館は、フンボルト大学の日本学学科が大事に維持してくださっていて、感謝に耐えないものがあります。鷗外のドイツ語は大変優れたものであったとこのことで、言語への感覚が卓越していたことが分ります。本日は、その鷗外の文章について、種々の説明がなされますことを楽しみにしています。

最後に、多くの方々が東洋大学に運びくださいましたことに重ねて御礼申し上げますとともに、本日のシンポジウムが、実り多いものとなりますことを心からお祈り申し上げまして、歓迎の挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。